

聖書：マルコの福音書 10：1～12

説教題：神が結び合わせたもの

日時：2026 年 1 月 11 日（朝拝）

マルコの福音書 10 章は「イエスは立ち上がり、そこからユダヤ地方とヨルダンの川向こうに行かれた」と始まります。直前に記されていた地名は 9 章 33 節のカペナウムです。ガリラヤ湖畔の町です。そこからイエス様は南へ向かわれたこととなります。そしてこの旅はエルサレムへ向かう最後の旅でした。イエス様は十字架に向かっていよいよ歩み出されたのです。その途中でも群衆がイエス様のもとに集まって来たので、イエス様はいつものように彼らを教え始められました。そんな中、パリサイ人たちがやって来てイエス様に質問をした——それが今日の箇所です。しかし彼らは真理を知りたくて質問したわけではありません。2 節に「イエスを試みるために」とあります。つまり罠にかけようとして、悪意をもって近づいて来たわけですから。そのために彼らが選んだ問いは「夫が妻を離縁することは律法にかなっているかどうか」でした。この離縁、今日的に言えば離婚は当時も微妙で、人々の現実生活と深く関わる問題でした。これをどう考えるかについては色々な意見がありました。当時、保守的なシャーンマイ派は姦淫だけが離婚の正当な理由であるとししました。一方、リベラルなヒレル派は、妻の側に何か問題があれば、たとえば夫の料理を焦がしたという理由でも離婚できるとしました。さらに後の時代のラビ・アキバは、もっと美しい女性を見つけたら今の妻と離縁できるとまで言いました。こうした中、イエス様はどう答えられるのか、試そうとしたのかかもしれません。あるいは少し前にヘロデが兄弟ピリポの妻ヘロディアと離婚・再婚し、バプテスマのヨハネがこれを糾弾した記事がありました。その結果、ヨハネは捕らえられ、ついには殉教の死を遂げます。これと同じ道を踏ませようとする魂胆がパリサイ人たちにあったのかかもしれません。さてイエス様はこれにどのように答えられたのでしょうか。

3 節でイエス様は「モーセはあなたがたに何と命じていますか」と問い返されました。これはただ自分の意見を述べるのではなく、神の御心が記された聖書に立ち返るようという原則を示すものです。これに対してパリサイ人たちは答えます。「モーセは、離縁状を書いて妻を離縁することを許しました。」これは具体的には申命記 24 章 1～4 節を指します。このやり取りの内に、すでに今日の箇所の重要なポイントが明らかにされています。イエス様は「神は何を命じておられるのか」「聖書が積極的に

語っていることは何か」を問いました。一方、パリサイ人たちは「許しました」という言葉で回答しました。「命じていること」と「許していること」では意味合いが相当異なります。前者は積極的な意味を持つのに対して、後者は消極的です。イエス様は積極的な神の御心を問われたのに対し、パリサイ人たちは最低限の基準を持ち出して回答したのです。

そこでイエス様は5節で言われました。「モーセは、あなたがたの心が頑ななので、この戒めをあなたがたに書いたのです。」この「心が頑な」とは神に従わない、あるいは神に反抗しているという意味です。この後、はっきり言われるように、離婚は神の本来の御心ではありません。人々は神の御心を無視し、自分勝手に離婚しているだけです。しかし、そのまま放置すれば社会はさらに深刻な混乱に陥ります。夫は別の女性を妻とし、元の妻は宙に浮いたまま取り残される——そんな事態が生じます。そこでモーセはその混乱に歯止めをかけるため、救済策として、本来の御心ではないことを「許した」のです。これは墮落した人間社会に対する譲歩です。ですからこれを基準にしてはならないのです。これは神が本来意図されたことでも、命じられたことでもなく、最悪の事態を避けるために設けられた対応策に過ぎないのです。

そこでイエス様は神が聖書において積極的に示しておられる御心について、6節以降で語られます。まず6節でこう言われました。「しかし、創造のはじめから、神は彼らを男と女に造られました。」これは創世記1章27節を指していると考えられます。そこにはこうあります。「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。」そしてイエス様は続けてこう言われました。『『それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』のです。』このイエス様の言葉によれば、創世記1章27節で神が男と女に人を創造したと記されていることの内に、一人の男と一人の女が結婚において結び合わされ、一つのからだとなることが神の御心であるという意味も含まれていた、ということになります。もしかするとある人は、今の箇所からそこまで言えるのかと思うかもしれませんが、しかしイエス様は創世記1章27節を解釈しているわけではありません。神の御子として神が最初からそこに込めておられた意図を明らかにしておられるのです。そして確かにその視点をもってそこを読むと、それはごく自然なものであると私たちも理解できると思います。神が人を一つの性にせず、男と女という二つの性とされたのは、一人の男と一人の女が結び合わされて一つのからだとなるという御心を持っておら

れたからです。そしてそのことを明確に語る創世記 2 章 24 節をイエス様はここで引用されたわけです。

ここに「男は父と母を離れ、その妻と結ばれ」とあります。ここに夫婦の結婚関係は親との関係以上であるという神の御心が示されています。アダムもエバも、それぞれ人間の父と母はいませんでしたから、彼ら個人のことだけを考えれば、この表現は不要でした。しかし結婚の本質をはっきり示すため、最初の結婚においてこのように言われているのでしょう。十戒は前半の神に対する戒めと後半の隣人に対する戒めとに分けられますが、その後半の最初に置かれているのが「あなたの父と母を敬え」です。父母を敬うことがどれほど重要であるかが分かります。しかし聖書は、夫と妻の関係はそれ以上に深い結びつきであると言うのです。ここに「ふたりは一体となる」とあります。確かに「父と子は一体」「母と子は一体」とは言いません。しかし夫と妻については「もはや二人ではない」とまで語られます。二人ではなく一人なのです。そしてイエス様は最後にこう言われました。9 節：「こういうわけで、神が結び合わせたものを、人が引き離してはなりません。」一言で言えば離婚は神の御心ではないということです。これがパリサイ人の問いに対する答えでした。確かにこれはイエス様を試そうとした彼らに対する答えであったという点を頭に入れる必要はあると思います。イエス様は離婚に関する包括的な講義をここでされたわけではありません。しかしイエス様がここで示しておられる大切なポイントを私たちはしっかり受け止める必要があると思います。

それは私たちはすべてのことを神の本来の意図、本来の御心に立ち返って考え、それを基準とすべきであるということです。私たちはとにかく、神はどこまで譲歩くださるのか、どこまでなら外れても良いのかと、その最低ラインを聖書の中に探し出そうとします。そして「ここまでは許されている」「これはクリアーしているから大丈夫だ」と、そのラインを基準にしがちです。しかしそういう姿勢そのものがイエス様の方向とは違うということです。確かに聖書には罪に堕ちた私たちへの神の譲歩とも言える教えがいくつもあります。神の御心を無視し、頑なでわが道を行くと言って聞かず、結果、悲惨に陥っている私たちに神はなおもあわれみ深く対応くださっています。離婚についても聖書の中を捜せば、さらなるガイドラインが与えられていることを知ります。たとえば今日の箇所の平行記事であるマタイの福音書 19 章 9 節では淫らな行い、すなわち姦淫あるいは不貞行為があった場合は例外であると言われています。

一方の配偶者が他の人と姦淫を犯したら、その配偶者は他の人と一体となってしまう、もとあった一体性は破壊されます。その場合、離婚は神の本来の御心ではないものの認められると言われています。あるいはもう一つ、いわゆる「遺棄」も例外事項としてコリント人への手紙第一 7 章 15 節に語られています。これは相手が離れて行く、自分を捨てて行くという状況です。こちらが結婚の継続を願っても、これではどうしようもありません。二人は一体という関係が壊れています。その場合、離婚はやむを得ないものとして認められるとされています。ウェストミンスター信仰告白もこの「姦淫」と「遺棄」の二つを離婚が認められる条件として述べています。

しかしです。イエス様が今日の箇所でおられることは、何が許されているか、どうすれば問題なく離婚できるか、そのような抜け道を捜す態度で聖書を調べ、それを基準にするようであってはならないということです。例外規定に注目し、それを満たせば良いと考えるようであってはならない。むしろ私たちが注目すべきなのは例外ではなく、神がご自身の御心として積極的に示しておられることです。イエス様は神が本来意図された基準に照らしてすべてを考え、生きる者でありなさいと私たちに求めておられるのです。

10 節で家に入ると、弟子たちは再びこの問題についてイエス様に尋ねました。イエス様の言葉は彼らにとっても衝撃的だったのでしょうか。自分たちの考えとはあまりに異なっていたため、さらに理解を求めて尋ねたのだと思われます。それに対するイエス様の言葉はさらに衝撃的でした。11 節でこう言われます。「だれでも、自分の妻を離縁し、別の女を妻にする者は、妻に対して姦淫を犯すのです。」 12 節では妻の側から見た場合についても、同じことが言われています。ここをそのまま読むと、離婚して再婚する者は姦淫を犯すと言われているように聞こえます。とすると、イエス様は再婚そのものを禁じておられるのでしょうか。しかしここまで見て来た流れの中で考えるなら、これはごく自然な結論とも言えます。結婚した二人は一体になりました。それは人が引き離してはならない関係です。ですから人間が自分勝手に離婚し、再婚したとしても、神の前では前の結婚関係は継続しています。その状態で新たな結婚をするなら、それは前の配偶者に対して姦淫を犯すことになるのです。ただし結論から言えば、これは再婚の絶対禁止を語った言葉ではありません。これまで見て来たように、離婚は神の積極的な御心ではありませんが、罪あるこの世において、神が譲歩される形で認められる「合法的な離婚」というものがあります。そしてその離婚は再婚

への道を開くものです。ですから離婚は認められるが、再婚は認められないということはありません。合法的な離婚がある以上、合法的な再婚もあるのです。では合法的な再婚とはどのような場合でしょうか。それは伴侶が召されてすでに結婚関係が終わっている場合、あるいは先立つ離婚が合法的なものである場合です。もし先の離婚が合法的な離婚でなければ、それは神が認めていない離婚であり、神の前では結婚関係が継続しています。その状態での再婚は姦淫となる——そのようにイエス様は語っておられるのです。今日、芸能人等が性格の不一致や気持ちのすれ違いなどを理由に離婚や再婚を軽いものであるかのように繰り返している報道に接することがありますが、それは神の前ではまさに姦淫以外の何物でもないと言われていることを私たちは覚える必要があります。

以上見て来たように、イエス様はすべてのことを神の本来の意図、本来の目的に立ち返って考えるべきだということをはっきり示されました。神は結婚を制定し、二人を結び合わせました。その二人はもはや一体です。神がそのように結び合わせたものを、人は引き離してはならないのです。イエス様は例外規定については今日の箇所でも一言も語られませんでした。それほどまでに神の積極的な御心そのものに、私たちの目を向けさせようとしておられます。私たちはこの御心にこそ目を向け、ここに立って歩む者でありたいと思います。

その際、私たちは次の二つの誤りに陥らないように注意する必要があります。第一は、この神の基準を前にして、自分はもう大きく外れていると絶望したり、あるいは他の人をさばいてしまうことです。イエス様の言葉通りに歩めなかった人は、この箇所を読むたび、永遠に責められ続けなければならないではありません。この福音書の3章28節には、人の子らは、聖霊を冒瀆する罪以外、どんな罪でも赦していただけるとありました。ですからもし自分の過ちを思い知らされるなら、その罪を認め、告白し、悔い改めれば良いのです。そうするならその人は赦されます。キリストの完全な義によって神の前に義と認められ、神の愛する子とされ、永遠のいのちに生きる者とされます。また結婚生活が続いている人であっても、形式的に続いているだけで、神の御心にかなった状態にはないということもあり得ます。いつ壊れてもおかしくない状態にある人もいるでしょう。神の基準に照らせば「自分は完全だ」と言える人は一人もいません。ですから私たちに求められているのは、この基準の前で自らを省み、もし足りないところがあると思うなら、それを告白し、主の赦しと憐れみを求めるこ

とです。主はそうにへりくだる者を決して退けず、豊かに導いてくださいます。

第二の誤りは、だからと言って今の状態にとどまっていて良いと考えることです。イエス様の言葉は確かに厳しく、私たちにとっては高過ぎる理想のようにも思えます。ある人はこう思うかもしれません。創造の初めにおける神の御心を持ち出されても、今や罪に堕ちてしまった私たちにとってはどうしようもないのではないか。しかしイエス様がこのように語っておられるのは、私たちがこの本来の神の御心に生きることがなお可能だからです。福音とは、神が本来意図された状態への回復へと私たちを導くものです。ですからここに語られたことは決して手の届かない、絵に描いた餅のようなものではないのです。神の国の福音によって、私たちは本来あるべき状態へと回復されて行くことができます。だからこそ私たちはこの目標を見つめ続け、ここに生きる者であるよう、祈り続ける必要があるのです。

イエス様は言われました。「こういうわけで、神が結び合わせたものを、人が引き離してはなりません。」 ある人はこの言葉についてこう記しています。「私と妻の間に、困難や意見の食い違いが生じる時、『神が結び合わせたもの』というあの言葉が、私の心を落ち着かせ、感情を和らげ、私たちの人生に対する神の御心を改めて思い起こさせてくれるのです。」 結婚は自分の考えや都合で自由に扱って良いものではありません。神が結び合わせてくださったものです。この光の下で結婚を捉え直し、恵みを感謝し、悔い改め、そして神に信頼して歩む者でありたいと思います。神が定めてくださった結婚の良さを味わい、この恵み深い神を証しし、宣べ伝える歩みへと進む者たちでありたいと願います。